

第3章

ファシズム化するアメリカ

— 女医メリル・ナス博士への迫害と壮絶なる闘い



イベルメクチンを処方して
医師免許を停止されたメリル・ナス博士

第1節 イベルメクチンを処方して、医師免許の停止と精神鑑定

1

私は、『謎解き物語2―「メディア批判」赤旗から朝日まで、私たちはガリレオの時代に戻ってしまうのだろうか』を二〇二一年一月三十一日に出版しました。

ここでは、ワクチン接種に疑問を呈しただけで「陰謀論者」の扱いを受けかねない日本の現状を、「私たちはガリレオの時代に戻ってしまうのだろうか」と表現しました。

この現状は大手メディアだけでなく、左翼の新聞とされている『赤旗』や『長周新聞』にまで共通していました。これでは、「かつてガリレオが、教会権力に逆らって地動説を唱えただけで、危険人物とされた時代」に逆行してしまいかねません。

真理・真実を決めるのは教会権力でもなく、金力財力や政治権力でもありません。それは科学的実験によってのみ確かめることができます。

ところが今は、WHOがコロナ政策の是非を決めていて、コロナにたいする治療に実験的ワクチンを使うかイベルメクチンなど他の医薬品を使うかの自由が、現場医師にありません。国連加盟のほとんどの政府がWHOの指示に従っているからです。

そして、そのWHOを裏で支えているのが、巨大製薬会社やWEF(世界経済フォーラム)、さらにはビル・ゲイツ財団であることを、『謎解き物語1〜3』で詳述してきました。彼らの金力財力、メディア支配はそれほど絶大だからです。

2

したがって日本政府も、日本人が開発してノーベル生理学・医学賞まで受け、発展途上国で「奇跡の治療薬」「第二のペニシリン」と呼ばれているイベルメクチンに、いまだにEUA(緊急使用許可)を与えようとしていません。

日本政府のやっていることは巨額の税金を使って外国からの実験的ワクチンを(最近は経口薬や点滴薬も)輸入することのみです。イベルメクチンは予防薬としても治療薬としても目覚ましい治療実績をあげているのですから、これは壮大な税金の無駄遣いです。(イベルメクチンの治療実績についても、『謎解き物語』で詳述しました)

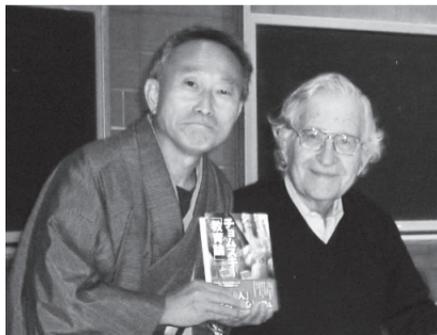
では「自由の国」アメリカは、どうなっているでしょうか。ここでも現状は日本とあまり変わりません。というよりも、実態はもっとひどいといふべきです。というのはWHOと一体になったFDA（アメリカ食品医薬品局）やCDC（アメリカ疾病管理予防センター）はイベルメクチンの使用を認めていないからです。

それどころかバイデン政権は、ひたすら実験的ワクチンを全国民に強制接種するという政策を強力に押し進めてきました。それに抵抗しているのが共和党が知事を握っている幾つかの州政府だという、皮肉な現象がアメリカに生まれています。共和党が「自由」を主張し、民主党が「強制」を主張しているからです。

3

今まで「リベラル・左翼」だと目されてきたアメリカの民主党が、ファシズムのドイツと同じような「強制」を主張し、実験的ワクチンに疑問を呈したり抵抗したりするひとなを「陰謀論者」と呼び、ひどい場合には「テロリスト」として社会から排除しようとする動きすらあります。

恐ろしいことに、左翼と目されてきた人物すら、その先頭に立ち始めています。その典



カナダ、ウインザー大学でチョムスキーと

型例がノーム・チョムスキーでしょう。

これまで私はチョムスキーを尊敬し、彼の著作のいくつかを翻訳しましたし、名著『マニユファクチャリング・コンセンスト（合意の捏造^{わづら}）』発刊20周年記念の国際学会がカナダで開かれたとき、わざわざウインザー大学（川を挟んで対岸からデトロイトが見えました）まで会いに行つたほどです。

ところが哀^{かな}しいことに、このチョムスキーすら次のような発言をしているのです。この発言で私のチョムスキーに対する信頼・尊敬は、大きく損なわれ
ることになりました。残念至極です。

* Remove the Unvaccinated From Society, Says Radical Leftist Noam Chomsky (ワクチン非接種者を社会から排除せよ。最左翼のチョムスキーが発言) by Kyle Schmidbauer October 26, 2021
<https://thelibraryoflft.com/2021/10/26/remove-the-unvaccinated-from-society-says-radical-leftist-noam-chomsky/>

このようなチョムスキーの発言は次の論考にあるように「右翼への贈り物」にしかならな
いでしょう。それどころかアメリカのファシズム化に手を貸すことにつながりかねません。

* “Coerced Vaccination: The Left’s Contempt for Bodily Autonomy during the COVID-19 Pandemic. A “Gift to the Right”?”

「ワクチン強制接種」：左翼はCovid19パンデミック騒動の間、「身体的自律性」の原則を軽視。それは「右翼への贈り物」？
<http://immethood.blog.fc2.com/blog-entry-771.html> (『翻訳NEWS』2022/01/30)

4

ところが、この「アメリカのファシズム化」「アメリカをガリレオの時代に引き戻すような動き」が、またもやアメリカで起きました。次の記事が、それを知らせてくれました。

* Medical Doctor Who Treated COVID Patients with Ivermectin and Hydroxychloroquine: License Suspended, Ordered to Undergo Psychiatric Evaluation for Spreading Misinformation

「COVID患者をイベルメクチンとヒドロキシクロロキンで治療した医師が、医師免許を一時停止され、精神鑑定を受けるよう命じられた。その理由は、偽情報を拡散したから」

<http://immethood.blog.fc2.com/blog-entry-768.html> (『翻訳NEWS』2022/01/25)

この記事によれば、メイン州の医療委員会は、二〇二二年一月一二日の命令で、高名なMIT(マサチューセッツ工科大学)で教育を受けた医師に、「患者にイベルメクチンとヒドロキシクロロキンを投与し、COVID-19に関する誤った情報を広めた」として、免許停止と精神鑑定を命じたからです。

ちなみに、このMITはチョムスキーが教鞭をとっていた大学です。

それはともかく、この女医は、「極めて多くのノーベル賞受賞者を産み出したことでは

名なMIT」で教育を受け、70歳になるまで41年間も医師としての治療実績をあげてきました。

だから患者から尊敬されることはあっても、治療ミスで非難されたことは一度もない人物です。

そのうえ、その治療実績の故^{ゆえ}に、有名な人名録『Who's Who in America』だけでなく世界人名録『Who's Who in the World』にまで掲載されるほど高名な医師です。

そのような人物の免許を30日間停止し、精神鑑定まで受けさせようとするのですから、メイン州では恐ろしい狂気が荒れ狂っていると云えます。アメリカでは以前からイベルメクチンへの攻撃が激しかったのですが、この事件はその頂点に位置するものではないでしょうか。

5

ところで他方、アメリカでは、イベルメクチンの使用を現場で積極的に進めようとする団体としてFLCCC（コロナ緊急治療最前線同盟）があり、この団体はイベルメクチンを使用しながら多くの患者をコロナウイルスから救ってきました。

そのようすは『謎解き物語』でも繰り返して説明してきたとおりです。

ところが、先述のとおり、このイベルメクチンの使用を何とかやめさせようとする動きは、FDA（アメリカ食品医薬品局）やCDC（アメリカ疾病管理予防センター）だけでなく、大手メディアからも執拗しつように続けられてきました。

この詳細は『謎解き物語3—ワクチンで死ぬか、イベルメクチンで生きるか』に述べてありますから、詳しくはそちらを参照して欲しいのですが、一つだけ例をあげるとすれば、テキサス州の農夫がイベルメクチンで死んだという次の記事です。

* A Myth is Born: How CDC, FDA, and Media Wove a Web of Ivermectin Lies That Outlives The Truth
「神話はこうして生み出された。CDCとFDAとメディアがイベルメクチンに濡れ衣を着せ、真実を見えなくしてしまった手口とは」
<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-770.html>（『翻訳NEWS』2022/01/26）

ここで死んだとされる農夫の死因はイベルメクチンとは何の関係もありませんでした。にもかかわらず、権力側が執拗しつように「イベルメクチンは危険だ」という神話、嘘話の網をつくりあげようとするようすは、この記事の記者の、たゆまぬ努力と探究心に支えられて、生々しく描かれています。

6

それはともかく、優れた医学者であるメルル・ナス博士は、「彼女によって被害が出た」とするイギリスDaily Mail紙の記事に、さっそく次のような反論を書いています。それは、オンライン誌『GlobalResearch』によれば次のようなものでした。

* Dr. Meryl Nass: My Side of the Story, and the Constitutional protections that I believe are being abridged by the Misinformation Witch Hunt 「米国医師メルル・ナスの訴え。『私の言い分。合衆国憲法により守られていたと思っていた権利が、偽情報による魔女狩り』によって剥奪されてしまった」
<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-767.html> (『翻訳NEWS』2022/01/25)

本当は、この彼女の言い分をここで紹介したいのですが、もうかなり長くなってきたので次節に回します。

〈追記〉

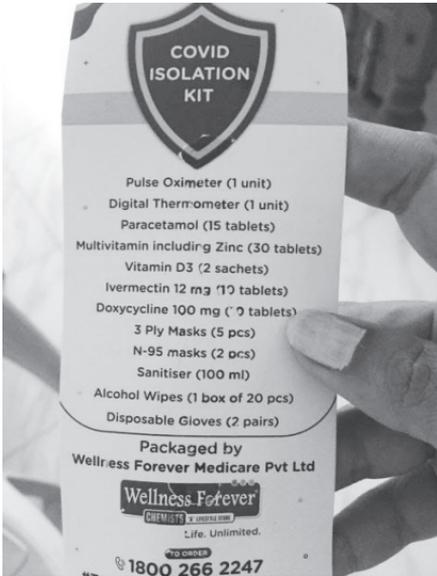
『謎解き物語1〜3』で紹介したインドにおけるイベルメクチンの成功が、インド最大の州ウツタル・プラデーシュの政府を動かして、イベルメクチンを含む「コロナ撃退セット」を無料配布するに至りました。

それを伝えてくれたのがオンライン誌『GlobalResearch』の次の記事です。画期的ニューズです。アメリカのファシズム化にたいする強力な反撃になるでしょう。

* What People in India Have Received to Battle COVID Successfully: Ivermectin (コロナと闘って成功したインド民衆が受けたもの、それはイベルメクチン)

〈副題〉 Look at the package contents and get even more angry with how the US government has failed its citizens (そのパッケージのなかみを見よ。そしてアメリカ政府が市民に与えた失策に、もっと怒れ)

<https://www.globalresearch.ca/what-people-india-received-battle-COVID-successfully/5767573>



イベルメクチン12mg 10錠が入っている!!
インドのウタル・プラデーシュ州が州民全員に配った「コロナ反撃パッケージ」
<https://www.globalresearch.ca/what-people-india-received-battle-COVID-successfully/5767573>

第2節 ナス博士「憲法で守られていたはずの権利が剥奪された」

1

私は前節を次のように結びました。

それはともかく、優れた医学者であるメルル・ナス博士は、イギリスDaily Mail紙が流した「彼女によって被害が出た」とする記事に、さっそく次のような反論を書いています。それは、Global Research誌によれば次のようなものでした。

「米国医師メルル・ナスの訴え。『私の言い分。合衆国憲法により守られていたと思っていた権利が、偽情報による魔女狩り』によって剥奪されてしまった」

<http://mmethod.blog.fc2.com/blog-entry-767.html> (『翻訳NEWS』2022/01/25)

本当は、この彼女の言い分をここで紹介したいのですが、もうかなり長くなってきたので次節に回します。

2

そこで以下ではナス博士の言い分を紹介します。これは彼女の下記ブログに書かれています。

* <http://anthrax-vaccine.com>

このブログの題名「anthrax-vaccine」を見れば分かるとおり、米軍がイラク戦争で炭疽菌 (anthrax) を生物兵器として使ったので、それにたいして、ワクチン研究者としてナス博士はこの「炭疽菌ワクチン」と題するブログを書き始めたのでした。

ナス博士がたどってきた経歴、そしてついには有名な人名録『Who's Who in America』や世界人名録『Who's Who in the World』にまで登録されるように至った業績は、左記のサイトに詳細に記されています。

* メリル・ナス博士の経歴

<https://docs.google.com/document/d/1P-qoaVgEfmWiQDx8PbWrwBL0dbXD2DwUj1914o5uH1s/edit>

3

この経歴を読んで、ナス博士は炭疽菌^{たんそ}だけでなく、アメリカがイラクに侵略した結果、多くの兵士が「湾岸戦争症候群」に悩まされた問題にも、精力的に取り組んできた医師・研

究者であることが分かりました。

この「湾岸戦争症候群」は、米軍が使用した劣化ウラン弾や兵士に強制接種されたワクチンによるものではないか、という強い疑いが出されてきました。このようにナス博士は炭疽菌^{だんそ}だけでなく化学兵器の専門家としても、アメリカでは有名な人物でした。

ところが、よりによって米国メイン州の医療委員会は、このような人物の医療免許を30日間も停止しただけでなく、博士の精神鑑定まで要求したのです。これは狂気の沙汰です。そのことがメディアの関心を集め、英紙 Daily Mail までがとりあげるといふ騒ぎになりました。

これは、かつて「イベルメクチンを使用した農夫が死んだ」という偽情報を信じた大手メディアが、イベルメクチン攻撃の先頭に立ったという事件と非常に似ています。この詳細は先述のように、『謎解き物語2—私たちはガリレオの時代に「戻るのだろうか」で書きましたので、ここでは割愛します。

いずれにしても、これらの事件は、「巨大製薬会社やWHO（世界保健機構）が、イベルメクチンという『安全・安価かつ有効な経口薬』が世界中に広まることにたいして、いかに大きな恐怖感と敵対心を持っているか」を示す典型的な事件でしょう。

というのは、EUA（緊急使用許可）が認められている実験的ワクチンの地位を、イベルメクチンが脅かすからです。ですから、アメリカでイベルメクチンの使用が広まることは、なんとしても阻止せざるを得なかったわけです。

しかし、それは同時に「ファシズム化するアメリカ」を示す典型的な事件ともなりました。

4

それはともかく、彼女のブログを翻訳することによってメリル・ナス博士の言い分を直接に聞いてみたいと思います。以下が、そのブログに掲載されていた「言い分」の私による全訳です。

私の言い分。偽情報にもとづく魔女狩りによって損なわれた憲法上の保護

医師メリル・ナス

1

私はこのブログの最後に、米国憲法修正条項をいくつか抜粋しています。この条項は我が国の最高法規です。

州政府も州機関も、これらの条項が保障している権利を軽視することは許されていません。これらの権利はすべての米国民に保障されているからです。

しかし、私の州の医療当局はこれらの権利を剥奪しようとして躍起になっています。州の医療当局は、私を納得させる証拠を何一つ持っていないことを認識しているようです。だからこそ医療当局は私を法的尋問にかけようとし、私がここ6カ月に診察したすべての患者のリストの提出や、それ以上のことを求めています。

2

私の話がこんなにもメディアを賑わせたのは、州医療当局が私に精神鑑定を受けるよう命じたからです。そのことが、国が所持する医師記録に強制的に記載されてしまい、その結果、私のことがメディアに知られることになりました。

メイン州の医療当局が私を公的立場から「排除」しようとしているのですから、私は自分の言い分を公的に明らかにすることに何のためらいも感じていませんし、私は自分の気持ちを公表することをやめません。

「火のないところに煙はたたない」というから、私が本当に患者にとって危険な医師かもしれないと考えている人に、私のこれまでの経歴や、私が患者をどう診察してきたかを知っていただきたいからです。

3

私はおそらくメイン州で最も安全で最も患者を大切にしている医師の一人でした。その理由を

今から述べます。

(1) この件に関して患者から州の医療当局に苦情の報告はひとつもありません。何ひとつ。
(2) 私は今まで誤診をおこなったことで責められたり起訴されたりしたことはありません。41年間の医師生活で一度もありません。

(3) 私が州の医療当局から注意を受けたのは一度きりです。それは15年ほど前のことでした。しかし告発した人は私に謝罪しました。詳しい調査をおこなったところ、その告発者は私の治療が素晴らしいことが分かったからでした。そのときは、州の医療当局は私を支持しました。
(4) 私は、慢性的な病気や、病名がはっきりしない症状の病気など、難病の治療に取り組んで成功してきた医師としてよく知られています。

(5) 私は有名な人名録『Who's Who in America』、世界の人名録『Who's Who in the World』に載せられました。それは私の業績が認められたからです。具体的には、伝染病が生物兵器によって引き起こされたことを示す最初の科学的分析をおこなったことです。

(6) 私は医師としての経歴のほとんどの時間を、これまでの治療法では「見捨てられてきた」患者たちの治療にあてるよう努力してきました。

そのような患者の中には、危険な炭疽菌たんそワクチンを打つよう強制された兵士たち、そのワクチンにより障害を受けた兵士たち、湾岸戦争後のストレスに苦しんでいた退役軍人たち、慢性疲労症候群の患者たち、ライム病患者たち、さらには他の医師たちが診断や治療できない奇病かかに罹った患者たちがいまいました。

私はこれまでの実践をCOVID患者の最善の治療にも活かすよう努力してきました。それは他の医師たちが治療法を見いだせず、患者の多くを院外に出してしまうことしか出来ていなかったからです。

(7) 私はCOVID治療の治療費は1回60ドルを請求していました。この治療費には他の必要な費用は含まれていません。私が仰天したのは、州の医療当局が、私が患者に送った手紙や、メールや、かけた電話の多くを、「不法治療だ」と批判していたことです。まるでそのメールや電話がすべて不法なものだったかのように。

他の医師たちは、診察室から外に出た患者とは、その後、少しもやりとりをしないのでしょうか？ 私は夜や週末でも患者たちと会話してきました。そして多くの患者たちとのやり取りの内容を記録していました。他の医師たちも同じことをやっていると思います。

しかし州の医療当局は、そのような患者たちに対する褒められるべき行為と、私がたった一度電話をかけ損ねたことを(その電話に対しては、私は掛け直したのですが、その時、相手の医師が病院を出たあとでした)、過失の罪に変えようとしてきました。挙句の果ては、私の認知力の低下、精神的疾患の罪に。

4

ファイザー社やバイオテック社のCEOでさえ効果がないと考えているワクチン接種を支持せず、イベルメクチンやヒドロキシクロキンのような安定した効果が期待でき法的に認可された医薬品を使って患者の治療にあたらうとすると、そのような医師を、彼らはどんなこと

があっても阻止せねばならないようです。

COVIDの治療法として、従来の治療法以外の治療法を望んでいる患者たちはどうなるのでしょうか？ 従来の治療法とは、アンソニー・ファウチや、フランシス・コリンズや、ローレンス・タバックなどが中心となっている米国保健省が決めている治療法です。

そしてこれら3名は結託して、COVIDが研究室で人工的につくられた可能性を隠そうとしていきますし、「グレートバリントン宣言(Great Barrington Declaration)」（*）を執筆した名譽ある医師たちを「引きずり降ろそう」としています。

「*米国の3名の医学博士が出した、COVIDを難病扱いしないことを求める提言」

言い換えれば、政府公認のCOVID治療には、まだ告訴されていない犯罪者が関わっているのです。いったい州医療当局は、このような新しい治療を求める患者たちにどう対処するつもりなのでしょう？

州医療当局は、これらの患者が安価で安全かつ効果的なCOVID医薬品を入手することを断ち切り、いかなる選択肢も否定しようとしています。さらには、そのような治療情報へのアクセスさえも断ち切ろうとしているのです。

州の医療当局が合衆国憲法修正第1条の条項を「反故」にし、政府が決めた治療法を患者たちに押し付け、患者たちと医師たちの間の侵すべからざる絆を破壊しつづけているかぎり、私は黙っているつもりはありません。

5

以下は私の補足です。

アンソニー・ファウチは、国立アレルギー・感染症研究所（NIAID）所長です。

フランシス・コリンズは、保健福祉省（HHS）長官を最近退官したばかりです。

ローレンス・タバックは、保健福祉省（HHS）の長官代理をつとめています。

この3名は、多くのメールが明らかにしているのですが、武漢の研究所にHHS（保健福祉省）が或る機関を通じて資金を投じていたことを隠そうとしてきました。

さらに嘘の科学論文を書き上げ、COVIDが研究室でつくられた可能性をかき消そうとしてきました（しかも自分たちの関わりが分からないようにこっそりと、です）。

また、グレートバリントン宣言や、その執筆者の3名を破滅させるための論文を発表することもおこなっています。さらにファウチは、連邦議会で複数回、嘘の証言をしています。

*以下に註として合衆国憲法修正条項を掲載しておきます。

合衆国憲法の修正条項

修正第1条「**信教・言論・出版・集会の自由、請願権**」〔一七九一年成立〕

連邦議会は、国教を定めまたは自由な宗教活動を禁止する法律、言論または出版の自由を制限する法律、ならびに国民が平穩に集会する権利および苦痛の救済を求めて政府に請願する権利を制限する法律は、これを制定してはならない。

修正第4条「**不合理な搜索・押収・抑留の禁止**」〔一七九一年成立〕

国民が、不合理な搜索および押収または抑留から身体、家屋、書類および所持品の安全を保

障される権利は、これを侵してはならない。いかなる令状も、宣誓または宣誓に代る確約にもとづいて相当な理由が示され、かつ、捜索する場所および抑留する人または押収する物品が個別に明示されていない限り、これを発給してはならない。

修正第14条「市民権、法の適正な過程、平等権」（一八六八年成立）

第1項 合衆国内で生まれ、または合衆国に帰化し、かつ、合衆国の管轄に服する者は、合衆国の市民であり、かつ、その居住する州の市民である。いかなる州も、合衆国市民の特権または免除を制約する法律を制定し、または実施してはならない。いかなる州も、法の適正な過程によらずに、何人からもその生命、自由または財産を奪つてはならない。いかなる州も、その管轄内にある者に対し法の平等な保護を否定してはならない。

〔註〕一八六六年六月一三日に議会を通過。一八六八年に七月九日成立。憲法第1条第2項は第14条第2項に移動された。

訳註：上記「憲法修正条項」の和訳はアメリカ大使館HPに載せられているものを転載した。

<https://americancenterjapan.com/aboutusa/laws/2569/>

〈追記〉

ナス博士が右で言及しているグレートバrinton宣言について、最近とみに権力寄りに

なっているウィキペディアでさえ、次のように解説しています。

新型コロナウイルス感染症への対応についての政策提言である。

同宣言は、二〇二〇年一〇月四日にアメリカ合衆国マサチューセッツ州グレートバリントンの米国経済研究所 (SEI) で、オックスフォード大学のスネトラ・グプタ教授、ハーバード大学のマーティン・クルドルフ教授、スタンフォード大学のジェイ・バッタチャリヤ教授によって作成され、署名された。

この宣言の執筆者によると、若者の死亡リスクは高齢者や病弱者より1000倍以上低いので、集団免疫に到達するまで集中的保護 (Household Protection) で、社会的被害を最小に抑えるため、学校や大学やレストラン等を再開しつつ、死亡率を最小化にするよう介護サービス等を保護するべきだと提案している。

この宣言では「コロナによる死亡リスクは、若者の場合、高齢者や病弱者より10000倍以上も低い」と述べられていることに注目して下さい。

〈本章のキーワード〉

イベルメクチン「奇跡の治療薬」「第二のペニシリン」

メリル・ナス博士『Who's Who in America』『Who's Who in the World』に掲載

『Who's Who in America』（アメリカの人名録）、『Who's Who in the World』（世界人名録）

アメリカのファシズム化、その1「ワクチン非接種者を社会から排除せよ」

アメリカのファシズム化、その2「医師免許停止30日、精神鑑定まで強制する」

米国憲法修正条項、

修正第1条「信教・言論・出版・集会の自由、請願権」

修正第4条「不合理な捜索・押収・抑留の禁止」

修正第14条「市民権、法の適正な過程、平等権」

グレートバリーントン宣言（Great Barington Declaration）、米国著名大学の医学博士3名が出した、

COVIDを難病扱いしないことを求める提言）

アンソニー・ファウチ（国立アレルギー・感染症研究所NIAID所長）

フランシス・コリンズ（保健福祉省HHS長官を最近退官）

ローレンス・タバック（保健福祉省HHSの長官代理）